

清澄寺草創考

鹽田義遜

第一 從來の研究

一、清水先生の研究

二、山川氏の研究

第二 草創の研究

前篇 虚空藏菩薩の研究

一、清澄に於ける虚空藏菩薩關係の文獻

二、經軌と虚空藏菩薩

三、我が國に於ける造像

四、我が國と求聞持法
五、東國の三虚空藏
六、求聞持法と清澄山
後篇 草創史の研究

一、不思議法師の草創說

二、不思議法師の研究

三、慈覺大師の草創說

四、慈覺大師東國傳道の史實と遺跡

第一 從來の研究

一、清水先生の研究（附岩村師說）

清澄寺の草創に就て述べやうと思ふが、これに就ては既に清水、岩村、山川の三師に依て、殆んど盡されて居る故に、改めて研究する必要はないが、その草創に就て少しく疑問がある故に、その点を述べて見たいと思ふのである。

由來清澄寺の宗旨に就ては、少くともその草創當時と、宗祖遊學時代と、その後の變遷との三点に就て述ぶべきであらう。而して古來より問題の中心は、その第二の宗祖時代に該寺が、天台なりしや、眞言なりしや、換言すれば台密なりしや東密なりしやの論であつた。而して此の問題に就て最初に研究を試みられたのが、清水師の双椶學報（二、

九七.)に於ける「清澄山宗旨考」である。該論文は大体次の如き八證を以て、台密なりとの結論である。

一、「宗祖開宗前の御述作の「戒体義」が理同事勝、顯劣密勝の台密義なること。

二、「清澄寺大衆中」に圓密の疏借用に就て、天台の疏には單に書名のみを擧げ、眞言のものには人名を掲げて、特に「眞言の疏」といへること。

三、「報恩鈔」に慈覺、智澄、安然、惠心の謗法のみを破折せること。

四、「善無畏鈔」に依れば、清澄山に東密に無き稱名念佛の行はれ居りたること。

五、宗祖が遊學の最初高野に行かず、寺門に行かず、直ちに叡山の尊海に伴ひ、山門に登られしこと。

六、「法華題目鈔」に依るに、宗祖の伯母は天台宗信者なる故に、御兩親も亦同一信仰ありし故に、清澄に出家得度せしめしこと、

七、「聖祖の御乳人」(日宗新報二〇四)瀧口氏は、現に小湊附近の内浦にあり、その菩提寺西蓮寺は天台宗で、同寺の縁起に依れば、本尊は藥師であり、且つ道善御房は文暦元年同寺より清澄寺に移住せりといふこと。

八、筑後の藤原日臣師の「清澄寺に登る記」(日宗新報、二四四)に依れば、開山は不思議律師にして、開基の當時より天台宗にして、徳川氏の始めに眞言宗に改轉したるも、本尊は古より虚空藏菩薩なりしこと。

以上の八證を以て

上來の理證事證に依りて余は斷じて、宗祖當時の同山及び道善房の天台眞言なることと、同時に、宗祖の出家は眞言宗と雖、是れ即ち台密にして、弘法の東密眞言ならざることを信じて疑はざるなり。

と述べて台密なりと論斷し、更に本門宗要鈔の「十八歲得度道善より東寺家の眞言を習ふ」(他受用、七、二五左)の東密な

りとの説を反駁して居る。

更に清水師は大正十五年十一月刊行の日蓮主義研究叢書第一編の「清澄師友對吾祖大士」(日蓮聖人出家得度の宗旨)に於て、前説を未定稿として開宗前後の遺文十七篇(戒体義、開宗前開宗後對清澄篇として、當世念佛者無間地獄事善無畏鈔、佐度御勘氣、義淨房御書、清澄寺大衆中、報恩鈔、全送文、聖密房、華果成就書、本尊問答鈔の十篇、問題例の新尼鈔、大尼御返事新加、光日房御書、光日上人御返事、光日房書延外、光日尼御返事集續)の文意に依て、清澄寺を以て矢張天台法華宗即ち台密なりと論證し。更に前掲六、七、八の事證以外に、

九、明德三年(聖滅一二〇)の古鐘銘に依れば「慈覺大師草創」なるも、當時天台宗より古義眞言に改宗せし故に、その後執筆した「宗旨名目」(上一二左)に「東寺流の眞言宗」と日實が當時の宗旨を以て、往年道善房の宗旨と推斷し、一犬虛を吼へて萬大實を傳へ、その後東寺流の眞言なりといふに至りしなりと斷じ、啓蒙(一四、上)の慈覺建立の台密なりしも、中世高野末となりし説を以て謗證とすること。

一〇、該寺執事岩村師の古鐘鑄造當時の寺主「前大僧正、法印大和尚、弘賢」は貞治五年本寺の二の長者で、貞治を去ること二十余年明德三年頃、天台宗より眞言古義流に改宗し、更に文和四年智山派の學匠中恩房賴勢、東照宮の歸依に依り、清澄寺董席を拜命し十萬石の格式を與へられ、爾後新義派に屬し、公命に依つて諸宗の大徳を住持たらしめしこと。又天正十四年里見安房守義忠より百六十六石の墨付、慶長十五年四月家康の命に依り關東四箇黨刹(日光、足利行道、筑波、當山)の隨一として罪人の赦地とせられしこと。元和二年秀忠より百七十七石六斗余の朱印あり、清澄寺寶物、寛永四年賴勢への令旨、同十一年賴勢資空心房賴昌への付屬狀に明かなる如く、徳川の初期新義眞言に付屬したること。

以上の外、御遺文の内容に就ても詳説して居るが、以上の十證を以て、最後に

彼（不思議法師）開闢以來一定の宗旨なく、慈覺の中興に依りて天台宗となり、將て大士當時に至りし也。（四四）と述べて、宗祖當時は台密なりの結論は双榎學報と同一徹である。殊に注意すべきは第三章、第三節、並に第四節の初に於て動もすれば不思議法師の開創説を否定し、慈覺開創説となさんとする点である。

次に岩村義運師の「清澄寺私考」（大正十二年稿）並に「安房清澄寺緣起」（昭和五年稿）の説であるが、師の古來傳説、古記録、宗祖御遺文等に依つて

光仁天皇の寶龜二年不思議法師來り、大柏樹にて虚空藏菩薩の尊像を刻し、一字を建立せるを草創とし、爾後六十余年仁明天皇承和三年慈覺大師東國巡錫の砌此に來り仙境を歎し求聞持法を修し、中興を爲し、古鐘銘に依り明德以來古義眞言となりしこと云云。

と述べて居るのである。

從來の研究は清水師は遺文を中心史料として、宗祖出家當時は台密なりしことを論證し。岩村師は草創並にその後の變遷を清澄の史料に依て記述せられたのである。最後に如上の兩説を中心として、宗祖の當時は台密、後世東密なる内容を集大成したのが、山川氏の「清澄寺宗旨の變遷とその寺格位地を考ふ」（日蓮聖人と研究（一）、^{八三}）である。

二、山川氏の研究

山川氏の論述中注意すべきは、一に他受用の「本門宗要鈔」を以て、宗祖當時に清澄寺を以て眞言宗なりと斷じたる文献の最初とし、「宗旨名目」を始め、「註畫讃」「高祖傳」「高祖年譜」等孰れも宗要鈔に依れることを詳説し、次で宗要鈔の記事と偽作年代を考定し、富士派大石寺日道の「御傳土代」には宗要鈔の材料が少しも使用せられざるも、西山本

門寺の開山日代の延文五年の雜記「園城寺申狀」には

法華宗要集、聖人御作云云、自「下野國」出之。於「文句」者雖爲「當家助成」。一向非「聖作」疑書也、定後學可「迷惑」歟。日代門徒不足「許用」仍記之。

延文五年六月晦日 日代判（宗全興門集二三九）

とあり、又稻田師所藏の「本門宗要鈔」の奥書には

下野國の法華堂において御正本を以て書寫し奉る（研究一、三九）

とある依て宗要鈔は日道寂曆應四年聖滅五
九年より、日代の延文五年聖滅七
八年の約二十年間の僞作と斷じて居るのである。

又朝師の「化導記」は「宗要鈔」を全く使用しないが、「波木井殿御書」は屢使用して居ると述べ、それに就て諸種の事情を綜合すると、「波木井殿御書」は「本門宗要鈔」を富士派の僞作と認めて、これに對抗するために、諸御書の文を補綴し、身延側の何人かにより、擬作せられたものではないかとも推定せらる。

と述べて居るが、筆者が曾て「三大秘法鈔の研究」に於て「宗要鈔、三秘鈔、一期弘法は共に富士山戒坦を主張する謀書で、前後は不明だが、巧拙は確かに認められる。三秘鈔は最も巧であつて、他の諸書は拙劣である」と述べ、陳門の童蒙懷覽集が宗要集を日代の僞作（宗全顯本二
三八二）との説を出し、「三秘鈔」は代師なりや否や不明であるが、三位順師寂の元和三年聖滅
七四以前、興師寂の正慶二年聖滅
五二までの間約二十年間の作と推考したが、宗要鈔が延文五年の代師雜記で同書聖滅
五九以前、道師滅後の約二十年間とすれば此の結論は三秒鈔の我等の結論と粗ぼ一致するのである。

然るに山川氏はこれに對し、又往年法華の「種々御振舞鈔に就て」の拙論に對して、論外なるその眞蹟の所在に關する忽緒の誤見に就て、「研究と想像との混同を警む」の一文を草して、その錯誤を綿密に是正されたことに對しては、

甚深の謝意を表するものであるが（棲神十七號、御遺文講義、第十七號當本篇卷首參照）その中筆者が「三大秘法鈔の研究」一三の「三秘の次第と法門の次第」に就て偽書の例として述べた、錄外の「波木井殿御書」の内容を、錄内の眞偽を談する折に、周知の事實なるより改めて錄外といはずして、錄外の「波木井殿御書」の事實を述べて、偽書の例とせるに對し、錄内の「波木井殿御報」を以て偽書なりと斷ぜりとは、これ全く自己の忽緒を以て人に強いるものである。これこそ錄外と錄内の混同である。然るに「三大秘法鈔の研究」に對して、偶御振舞鈔の記事の錯誤を以て、同系の錯誤で想像に根據せる任意作業で、論理的研究でないとは何を意味するか了解に苦しむものである。よし研究に想像を混同したにもせよ、同時代の異人の文体を比較して、同人の文の眞偽の比量とするには増して居るのである。常盤博士が某氏の論評に對して「學者的態度であつてほしい」といはれたのは至言である。山川氏に對して感謝の意を表し、併せて學者的態度を以て指導せられんことを訴ふるものである。余談に入つたが山川氏の宗要鈔の偽作年代と、我等の三秘鈔のそれとは暗に一致して居るのである。

二に元祖化導記の或説の慈覺建立説、金山鈔の觀妙日存の「慈覺流の眞言」の二文を出し、最初の學的考證者として清水師を掲げたること、三には明德三年の鐘銘に依り願主弘賢を、東大寺長者補任中に指摘し、更に鶴岡八幡宮社務職次第に依つて、弘賢を鶴岡八幡第二十代の別頭で三十一歳より八十六歳の應永十七年までの五十六年間の在職、眞言醍醐三寶院親快方の法流で清澄寺のみならず、宗門所屬にあらずして、幕府の官命に依る別頭なりと論斷し。最後清澄寺の史料に依て、その後變遷を詳述して居る。要するに慈覺以來台密であつたが中古東密となり、宗要鈔以來宗祖當時も東密なりと誤られ、近古新義眞言となり今日に至れることを述べたものである。

以上の研究を綜合すれば、宗祖當時の清澄寺を台密とするに就ては

一、清澄寺の古鐘銘

二、宗祖遺文の記述

三、西蓮寺を中心とする傳説

の三点がその典據となるのであるが、第二の遺文中心の研究には清水師の執られた教義中心の研究と、山川氏の執られた「圓頓房、實智房、觀智房、實成房、淨圓房等で、圓の字多く密の字の付いたものが一つもない、それ眞言宗よりも天台宗に親しみ多い房號のみである」(研究一、八六)といひ、又「遺文に現はれたる語勢と、そこに表はれたる事實とに依て、動かし難いものである」と述べて居るが、人名は勿論聖密房の如き密字を付したのもあるが、大体に於て教義以外の人名その他の事實(勿論宗教的事實は嚴密にいへば教義の表現ではあるが)に就ての研究もその一方法である。而してその結論が宗祖當時台密なりとは、何人も承認し得る所であらう。

併し乍ら上述の研究は宗祖當時並にその後の清澄寺の宗旨考であつて、更に溯つては草創に就ては唯不思議法師なりといひ、慈覺大師を中興といふ外未だ充分の研究はない様である。随つて宗祖出家得度の宗旨の研究は充分であるとしても、進んで清澄寺草創に就て研究することも強ち無用でなく、且つ然らざれば宗祖出家得度の宗旨も徹底したのである。故に今は専ら草創以來宗祖以前の清澄寺の草創考を草して見ようと思ふ。

第二 草創の研究

前篇 虚空藏菩薩の研究

一、清澄に於ける虚空藏菩薩關係の文獻

清澄寺の本尊が虚空藏菩薩であることは、岩村義運師の「清澄寺縁起」に

人皇四十九代光仁天皇の寶龜二年、不思議法師といふもの此山に來り、一株の老柏樹を以て虚空藏菩薩を刻し、假に小堂をむすびて安置せるを寺の草創とす

と記し、「安房國清澄寺縁起」には

當山の本尊は虚空藏菩薩なり、此の菩薩は往古より汎く我國に尊信せられ、所謂虚空菩薩求聞持法は、夙に世に行はれたり。(四)

と述べ、古くは明德三年の古鐘銘に

房州千光山清澄寺者、怒覺大師草創、往昔有鐘、破壞久矣。何以驚瞬_レ止_二酸苦_一、行脚比丘惠闇、參禮虚空藏大士_一、以欲_下發_二大心_一補_中此缺_上、遍募衆緣_一成就其切云々

とあることに依て、清澄寺が往古より虚空藏菩薩を本尊とすることは明かである。殊に虚空藏菩薩が此の寺の本尊なることを反覆し、且つ「日本第一の智者たらしめたまはむ」ことを祈誓し、その感得あつて、生涯の忍難弘通の功德を以て菩薩への報恩に擬したのは、實に吾が日蓮聖人であつた。今遺文中に見ゆる明文を徴すれや左の如くである。

一、善無畏三藏抄(文永七年)

幼少の時より虚空菩薩に願を立て、云く、「日本第一の智者と爲し給へ」と云々、虚空藏菩薩眼前に高僧とならせ給ひて明星の如くなる智慧の寶珠を受け給ひき、乃至此諸經諸論諸宗の失を辨へる事は、虚空藏菩薩の御利生、本師道善御房の御恩なるべし、(八六四)

二、清澄寺大衆中(建治二年)

生身の虚空藏菩薩より大智慧を給はりし事ありき。日本第一の智者となし給へと申せしを、不便とや思しけん、明星の如くなる大寶珠を給ひて右の袖にうけとり候し故に、乃至虚空藏菩薩の御恩をほうぜんがために、建長五年四月二十八日、安房國東條の清澄寺道善之房持佛堂の南面にして、淨圓房と申す者、並に少々の大衆に、これを申しはじめて、其後二十余年が間退轉なく申す。(七三)

三、聖密房御書（建治三年）

これは大事の法門なり、こくさう菩薩にまいりて、つねにより奉らせ給ふべし。(五六)

四、光日房書（破良觀等御書）建治二、三？

予はかつしろしめされて候がごとく、幼少の時より學文に心をかけし上、大虚空藏菩薩の御寶前に願を立て、日本第一の智者となし給へ、十二のとしより此願を立つ、其所願に子細あり、今はくはしくのせがたし。(七八)

現存するものは以上の四文であるが、尙ほ「妙法尼御返事」に「一つの願をおこす」(七九)といふは、今の四の光日御書と同様に、虚空藏菩薩に對して、日本第一の智者となし給への願なることは勿論である、かくて此の願の結果が

此諸經諸論諸宗の失を辨へる事は、虚空藏菩薩の御利生、(善無畏鈔)

の感恩となり。

佛教をきはめ佛にもなり、恩ある人をもたすけんと思ふ(佐渡御勘氣鈔、七〇)

の誓願となり。

智者に我義破られずば用ゐじ(開目鈔、六八)

の大願とも顯はれ、「別當御房御返事」に

これへの別頭なんのことは、ゆめ／＼をものはす候(一〇〇)

と清澄の別頭の辭退となり

南無妙法蓮華經の七字を日本國にひろめ、震且、高麗までも及ぶべきよしの大願をはらみて、其願の満すべきしるしにや、大衆古國の牒狀しきりにありて、乃至日蓮は閻浮第一の法華經の行者なり、天のあたへ給ふことわりなるべし。(全上)

との抱負となり、終に「報恩鈔」に於て

日本乃至漢土月氏一閻浮提に人ごと、有智無智をきはらず、一同に他事をすて、南無妙法蓮華經と唱ふべし。乃至萬年の外未來までも流布すべし。(一〇五)

の慈悲廣大の願は、悉く幼少の時虚空藏菩薩より賜つた、「明星の如くなる智恵の寶珠」の輝きに外ならぬ。故に聖人の是等の記録は、虚空藏菩薩を清澄の本尊としての最も明確に認識した、動かすべからざる文献である。

二、經軌と虚空藏菩薩

次に先づその根本ともいふべき、經軌に就て虚空藏菩薩を見るに、虚空藏とは梵語の阿伽捨藥波 *Ākaśa-gorphan* 又は説戯曩彦惹、伽伽那猷惹 *Gogona-gauji* 又虚空孕とも譯す。その名に就ては大集經十六の虚空藏品には

何因緣故名「虚空藏」。佛告「速辨菩薩」。善男子譬如下大富長者多諸民衆「無量庫藏財寶充滿、能行布施、心無慳惜、若行施時、貪窮往者、隨意所須、開大寶藏、悉能給與、彼諸衆生皆得適意、長者施已心喜無悔。善男子虚空藏菩薩亦復如是乃至得如來神足力」故、於「虚空中」隨衆生所須「若法施、若財施、盡能與皆令歡喜」。(正藏13—108)と説き、又大日經金剛頂經等にも屢其の名を見るのである、随つて大日經疏十一には

如_レ虚空_二不_レ可_二破壊_一、一切無_二能勝者_一、故名_二虚空等力_一。又藏者如_下人有_二大寶藏_一、施_二所欲者_一、自在取_レ之不_レ受_二貧乏_上。如來虚空之藏亦復如_レ是、一切利樂衆生事、皆從_レ中無量法寶、自在受用而無_二窮竭相_一、名_二虚空藏_一也。(39—696)
と釋せる如く、大財寶藏ある人の普く所欲の者を滿すが如く、此の菩薩は無量の法藏を流出して衆生を利益する故に此の名ある所以である。されば理趣經には一切如來種々供養藏廣大儀式如來を異稱し、顯教に屬する諸經に孰れも、如意寶珠を以て福德智慧の無量藏たる所以を表し。密教に在ては金剛界曼荼羅の北方金剛業菩薩と同体となし、又賢劫十六尊の一とし、南方四親近中金剛寶菩薩は同体なりといひ。胎藏界曼荼羅には虚空藏院の一院あつて、その主尊で現圖曼荼羅の西方第二重持明院の下方にあつて、寶部の菩薩として福智圓滿、萬德莊嚴の果と表すといふ。故に密教に於ては此菩薩を本尊として、聞持聰明を求むる諸種の眞言陀羅尼、造壇修法として求聞持法なる一法が存するのである。今一切經中虚空藏菩薩に關する經軌を出さば次の如くである。

- 一、虚空藏菩薩經、一卷、姚秦、弘始、一〇—一五(BC₁₀)佛陀耶舍譯(13—646)
- 二、佛說虚空藏菩薩神呪經、一卷、失譯(13—656)
- 三、虚空藏菩薩神呪經、一卷、劉宋、元嘉元—一八(BC₄₂₉)曇摩密多譯(13—663)
- 四、虚空孕菩薩經、二卷、隋開皇七(AD₅₈₇)闍那堀多譯(13—667)
- 五、觀虚空藏菩薩經、一卷、劉宋、元嘉元—一八(BC₄₂₉)曇摩密多譯(13—677)
- 六、大集大虚空藏菩薩所問經、八卷、唐、神龍元—大曆九(AD₇₅₃)不空譯(13—613)
- 七、大方等大集經虚空藏經、第八、五卷(AD₅₂₇)、北凉、玄始三—一五(BC₃₈₂)曇無讖譯(13—93)(或は聖賢譯、「佛書解

說大辭典」[七九])

八、五大虛空藏菩薩速疾大神驗秘密式經、一卷、唐、開元、一一—二四(註三三)金剛智譯(20—607)

九、佛說虛空藏菩薩陀羅尼、一卷、宋、咸平四(註四〇)、法賢譯(20—607)

一〇、虛空藏菩薩問七佛陀羅尼呪經、一卷、梁(註五七)失譯(21—661)

一一、如來方便善巧呪經、一卷、隋、開皇七(註五八)闍那堀多譯(21—665)

一二、聖虛空藏菩薩陀羅尼經、一卷、宋、法天譯、(20—604)

一三、大虛空藏菩薩念誦法(儀軌)、一卷、唐、天寶五—大曆九(註五九)不空譯(20—603)

一四、虛空藏菩薩能滿諸願最勝心陀羅尼求聞持法、一卷、唐、開元五(註六〇)善無畏譯(20—601)

以上の經軌して十四種を數へ、此の外大日、金剛頂經等にもその名は散見する所である。右の中(一)より(七)までは顯教に屬し、(八)より(一四)までは密教に屬するものである。又是等の中には同本異譯も相當ある故に、顯教の七種は大體(一)より(四)までを第一類、(五)を第二類(六)(七)を第三類と分ち、密教の七種は(八)を第一、(九)を第二、(一〇)(一一)(一二)を第三、(一三)を第四(一四)を第五の五類と分つことが出来る、即ち十四種は八類となるのである。而して是等の經軌を一貫した思想は、菩薩虛空藏は福智圓滿、萬德莊嚴の菩薩なる故に、若し衆生がその名を稱し(顯教)或は陀羅尼を誦す(密教)れば、能く衆生の諸願を滿すること、虛空の無邊なるが如く、功德無盡の法藏なるが故に虛空藏と稱し。且つその具德を表するに如意寶珠を以てして居るのである。且つ思想的には顯教より密教へと次第に發達し、行法に於ては稱名より眞言陀羅尼呪へと展開したものと見るべきである。

更に上掲の諸經軌の内容に就てそれを見るに、第一に最初の「虛空藏菩薩經」以下(二)(三)(四)の四本は同本異譯である。即ち佛が佉羅底翅山に於て、「四辨方三明梵行住破惡業障陀羅尼經」を説き給はんとする時、西方勝華敷藏如來

の佛國より、虚空藏菩薩神通を示視するや、その頂上の如意寶珠の因に就て、佛が菩薩の威神力を示し、菩薩は大慈悲を以てよく衆生の危難を救ひ墮獄の重罪を滅し、所求を充足すと説き、且つ

應於_レ後夜_ニ淨自洗浴著_ニ所潔衣_ニ、燒_ニ堅黑沈水及多伽羅香_ニ、於_ニ一切衆生_ニ起_ニ慈悲心_ニ、向_ニ於東方_ニ至心合掌、稱_ニ虚空藏菩薩摩訶薩名_ニ、乃至成_ニ就如是不可思議方便智慧_ニ、久已得_レ入_ニ佛功德海_ニ、(13—655)

と説いて居る。故に又能滿一切衆生所願如意成就菩薩ともいふ。又四本の中(一)(四)の二本が最も詳しく、(一)(三)はその序説を缺き内容稍畧である。(四)も序説を缺いて居るが、内容は(一)(三)を詳説したものである。

第二に(五)の觀虚空藏菩薩經は犯罪の衆生が虚空藏菩薩に依つて滅罪することを明したものである。即ち稱_ニ三十五佛名_ニ、別稱_ニ大悲虚空藏菩薩名_ニ、(13—677)

と説いて、犯罪の衆生が懺悔して三十五佛の名を稱し、別して虚空藏菩薩の名を稱し、澡浴燒香し、恭敬禮拜して菩薩を請すれば、菩薩即ち身を現し、頂上の如意珠と天冠を見、菩薩の哀愍によりて滅罪し、又三七日の懺悔滅罪のことも説かれて居る。要するに本經は虚空藏菩薩經の附屬經典である。

第三に(六)の大集虚空藏菩薩所問經と、(七)の大集經虚空藏菩薩品第八とは粗ぼ同一である。不空譯は大集經の虚空藏品の別出とも見られる。その内容は佛寶莊嚴道場に於て、諸佛刹より雲集せる菩薩の中に、東方大莊嚴世界の大虚空藏菩薩あるを見て、その無碍智を讃歎し、且つ虚空藏は虚空の無盡なる如く、喜根の無盡を説き、人天の授記菩薩の護持、並に囑累が説かれて居る。且つその内容は密部の經典と聯關ありと言はれて居る。

第四に(八)の五大虚空藏菩薩速疾大神驗秘密經で、これ金剛智三藏が金剛瑜伽經に依つて像末の薄福の比丘のために、諸願成就の種々の呪法を説いたものである。五大虚空藏とは福智(東) 能滿(南) 施願(西) 無垢(北) 解説

(中)の五虚空藏をいひ、曼荼羅、眞言、呪法等に依る念誦諸作法が明されて居る。

第五に(九)の佛說虚空藏陀羅尼であるが、これには同菩薩の陀羅尼として、諸經軌に會て類例のない陀羅尼が説かれて居るが、單に陀羅尼のみで何等行軌作法は説いてない。

第六に(一〇)の虚空藏菩薩間七佛陀羅尼呪經、(一一)の如來善巧呪經(一二)の聖虚空藏菩薩陀羅尼經と同本異譯で、佛が雞羅莎(喜樂)山林中に於て、惡疾、惡鬼に惱む二人の比上の苦悶を見て、佛の威神力に依て過去の七佛虚空中に現じ、虚空藏に對して一切の災厄除去の神呪を説いたものである。就中

若受持是呪者、令_二人壽命延長_一、所有習誦一聞領悟、終不_二忘失_一(31—561)
と説いて居るが、斯かる思想が後に漸く發達して、虚空藏求聞持法となつたといはれて居る。

第七に(一三)の大虚空藏菩薩念誦法は、金剛界菩薩部の虚空法の儀軌で、瑜伽金剛頂經に依り寶部の虚空藏菩薩眞言教法を説いたものである。最初に此の法の功德を説いて

若依_二此教法修行_一、業報等障皆悉消除、福德增長心神適悅(30—603)
といひ、作坦、供養、發願等の供養次第を説いて居る。

第八に(一四)の虚空藏菩薩能滿願最勝心陀羅尼求聞持法であるが、常に求聞持法を畧稱し、此の法は佛が諸波羅密平等三摩地に入つて説かれたもので、經の内題に「出金剛頂經成就一切義品」とある如く、金剛頂經十八會の第一會の別名であることは明かである。先づ能滿願最勝心陀羅尼を明し、且つ三世諸佛の説となし

若能常誦_二此陀羅尼_一者、從_二無始_一來五無間等、一切罪障悉皆銷滅、常得_二一切諸佛菩薩共所護念_一(20—601)
と説き、その尊形を示して寶蓮華上に半跏而坐し、寶冠上に五佛の像あり、左手に白蓮華を執り、華台上に如意寶珠

あり、右手は五指垂下向外し、與諸願の印をなし、造坦（木造壇）供養念誦を明し、その功德に依て身心清淨にして福德を増長し

一經_ニ耳目_一文義俱解、記_ニ之於心_一永無_ニ遺忘_一、諸余福利無量無邊、と説いてゐるのである

此の如く經軌を通觀するに、古來より虚空藏菩薩が福德智慧の守護佛として、觀音、藥師、地藏等と相竝んで民族的信仰として、相當に汎く行はれたことは、『虚空藏、虚空藏、やれ虚空藏』又は『三虚空藏』といふ言葉に依ても明かである。我が國に於ける現に有名なる虚空藏としては、山城の廣隆寺、觀智院、醍醐三寶院、奈良の北僧坊、大和の法輪寺、額安寺、河内の孝恩寺、近江の全勝寺、尾張の虚空藏堂等であり、就中法輪寺（立像）、額安寺（坐像）觀智院（五大虚空藏）金剛峯寺（坐像）、三寶院（繪像）等は何れも國寶の逸物である。若し東方に於ては安房の清澄寺、常陸の長福寺、會津の圓藏寺は日本三躰虚空藏と稱して居る。

三、我が國に於ける造像

然らば我が國に於ける虚空藏菩薩の造像の起源に就ては如何といふに、「東大寺雜集錄」第三に講堂の本尊に據千手菩薩と共に

虚空藏菩薩一躰 立高一丈、

右皇后御願天平十九年二月十五日始作、（佛全、一二一、三二）

と掲げたる如く、天平十九年（七四八）光明皇后の御作を始めとして、天平感寶元年（七四九、四月改元）有名なる東大寺盧舍那佛即ち大佛の脇士として、觀音と共に作られたことは、同書に

天平廿一年四月、自_二陸奥國奉_レ献_二黃金、由_レ之勅爲_二天平感寶、四月八日始奉_レ造_二大佛殿脇士觀音虛空藏菩薩像_一。
(同上二附)_一

とあるが、恐らく最初のもので、その他には「興福寺東金堂記」に

同(東金堂)東面後戸

金銅釋迦如來、座像長一尺四寸

脇士 觀世音菩薩

虛空藏菩薩 立像各一尺五寸

右三尊者本朝佛像弘通最初之靈像、從_二新羅國_一奉献之靈像也。古記曰神龜二年歲次丁卯秋八月、當堂勅願御建立之時、

右件之三尊、當堂後戸東向御安置之旨、勅碑文之趣也、(佛全一一九、三八三、四〇五)

とあり、且つ神龜四年(七二七)新羅より奉献のものなりといへば、既に釋尊の脇士として觀音、虛空藏を作ることが大陸には行はれて居たのである。故に此に習つて東大寺の大佛即ち盧舍那佛の脇士として、皇明皇后が造立せられたものであらう、斯く盧舍那佛の脇士に觀音、虛空藏を配したに就ては、勿論東大寺の大佛は梵網經に依つたものであり、此の脇士に虛空藏觀音を配したことは一見不釣合ではあるが、これは天台の教判から見ても、梵網の教主も華嚴の教主も同一である、「國請百錄」第一の十方普禮の文(此の文に依て久野氏は百錄を天台、章安後、八十華嚴譯出後と斷ずる)即ち

普禮十方三世諸佛、七處八會圓滿頓教盧舍那佛、

同、虛空不動戒藏盧舍那佛、

同、虚空不動定藏盧舍那佛

同、虚空不動慧藏盧舍那佛(46—795)

の文と此の思想に依り、註梵網に虚空不動の三學を説いた。〔「一心戒文」傳教全集別卷(24—1003)道璿律師等の思想に依ることは、久野氏の説「圓頓戒源流史」、宗教研究新九の一、^{四五}〕であるが、新羅奉獻の釋尊の脇士を盧舍那佛の脇士としたことは、天台教義に依らねば説明し得ぬ所である。孰れにしても如上の新羅傳來と目すべきものは脇士としての虚空藏である。

然るに脇士としてでなく單なる虚空藏即ち本尊としてのそれは「斑鳩古事便覽」の金堂本尊の部に

一、虚空藏立像 ○長七尺五分天竺像也。(佛全一一七、^{九五})

とあり。又「廣隆寺資財帳」にも地藏と同形の

綠色虚空藏菩薩像、一軀、居高六尺五寸

とあり共に道昌建立とあるが、これ等より推察するに單体即ち本尊としての虚空藏の造像も既に大陸に行はれたことが信じられる。而して此等の虚空藏の尊像が、早く飛鳥時代より傳へられて居つたことも信じなければならぬ。是等の信仰は孰れも顯經系統に屬するもので、これに就ては小野博士は「佛教の美術及歴史」に於て「觀虚空藏經」に依て考證せられて居る所である。此の点は美術史に就て知られたい。

併し乍ら此の虚空藏菩薩の信仰が、民間に於ける有力なる地位を有するに至つたのは、求聞持法の傳來に依るといはねばならぬ。

四、我が國と求聞持法

前掲の經軌に依て明かなる如く、求聞持法は虚空藏菩薩の信仰として、最も完備したもので、これ善無畏三藏が唐の開元四年(AD七一九)來唐して、その翌年求聞持法を譯出したのである。而してその翌六年即ち我が養老二年、當時の唐求法中の三論の道慈律師が歸朝の折傳來したのを初傳として、後の弘法の所傳と合して古來より二傳ありと傳へる。

第一傳は善無畏より道慈、善議、勤操を経て弘法に傳はり、弘法は入唐以前に之を修したことは、「三教指歸」の序に

爰有_二一沙門_一、呈_二余虚空藏聞持一法_一、說_二其經_一、若人依_レ法誦_二此真言_一、百萬偏_二得_レ暗_一、記一切教法文義_二焉_一。信_二大聖誠言_一、飛_二燄望_一、鑄_二燧_一、躋_二攀阿闍大瀧嶽_一、勤_二念土州室戸崎_一、不_レ惜_二谷響明星來影_一。

とある如く、阿波の大瀧嶽及び土佐の室戸崎にこれを修したことが明かである。

今道慈律師相傳の事情に就てこれを見るに、「元亨釋書」一道慈傳には

事吳智藏_一、稟_二三論學_一、大寶元年入唐請益、于_二時武后長安之始也_一。蹈_二勝地_一、尋_二明師_一、經律論多_二涉獵_一、益究_二三論之旨_一、養老元年歸_二盛_一、唱_二空宗_一、乃至慈在_レ唐逢_二密者_一、得_二虚空求聞持法_一。慈傳_二善議_一、議傳_二勤操_一、操傳_二空海_一云、(佛全一〇二六)と述べ、釋書には單に「逢密者」といひ、「傳通緣起」には

昔人王第四十四代元正天皇御宇、養老二年戊午、道慈律師從_レ唐歸朝、在唐一十八年、習_二學六宗_一、三論爲_レ本、入唐已前隨_二義淵便正_一學、法相宗、在唐六年真言第一、求聞持法特所_二精詳_一、自行化他常以_二此法_一。或云_二道慈隨_一智鳳_一受_レ求聞持法_一、而年代可_レ考。道慈以_二真言法_一授_二善議_一、慶俊_一議公授_二之于勤操_一、僧正、勤操授_二求聞持法于弘法大師_一、大師入唐已前於_二阿州大龍寺_一、(瀧嶽?)土州室戸崎等_一行_二求聞持法_一、道慈於_レ唐隨_二善無畏三藏_一、受_二學真言_一、開元四年善無畏來、同

六年戊午道慈還^ニ日本^ニ、三箇年中於^ニ唐傳受^ニ善無畏來^ニ大唐^ニ、初譯^ニ虛空藏求聞操法^ニ（佛全、一〇一、^{二二九}）

とこれ開元六年即ち我が養老二年道慈無畏より求聞持を相傳し、弘法入唐以前に行せしを傳ふるのである。

若し道慈の傳法歸朝に就ては、前掲の譯書には養老元年（七一七）といひ、「七大寺年表」（佛全、一二、^三）「僧綱補任」（佛全、一二、^{六三}）「傳通緣起」等は何れも養老二年（七一八）といふが、前述の如く唐の開元六年は我が養老二年なる故に、求聞持法の相傳もこの年である。されば果して清澄の草創が光仁帝の寶龜二年（七七二）とすれば、實に五十四年後に當るのである。更にその後の相傳に就ては、「傳通緣起」に依れば道慈の弟子に善議、慶俊の二人があつたといふが、善議に就ては釋書二に、

奉^ニ道慈受^ニ三論之學^ニ、又蹈^ニ愴浪^ニ入唐請益、當時學徒推^ニ博於議^ニ、歲八十四歲弘仁三年也。（佛全、一〇一、^{二六四}）

とあつて嵯峨帝の弘仁三年（八一二）八十四歳で寂したのであるが、道慈に受學といひ入唐請益といへば求聞持の相傳もあつたに相違ない。若し慶俊に就ては「釋書」二四に

事^ニ道慈學^ニ空宗、居^ニ大安、法華等寺、嘗開^ニ愛宕山^ニ爲^ニ第一世^ニ、天應元年爲^ニ僧都、性懷^ニ悲愍、好施^ニ貧病^ニ（同上、^{三〇〇}）とあつて、道慈傳には求聞持相傳のことは無いが、愛宕山月輪寺の名はこれ金剛界の月輪を表すのみならず、阿婆縛鈔百四に求聞持法の正念誦を明す下に

示云、字道觀者、軌云菩薩心上有^ニ滿月輪^ニ、然所誦陀羅尼現^ニ滿月中^ニ皆金色、其字復從^ニ滿月^ニ流出（佛全、三八、^{三三二}）とあるに見れば、月輪の寺名は求聞持法と表したのであらう。況や該地が「登臨最開濶の地なり、所謂十六州の山河目前に呈す」といへば、求聞持法の道場條件に全く契合するのである。此の点よりすれば慶俊も相承があつたのであらう。次に善議より相傳したと傳ふ勤操に就ては、「釋書」二の勤操傳には

後就^三善議法師、稟^三三論之宗（佛全、一〇一、^{二六四}）

とある外、神護景雲四年安中及び山階寺に千僧を度し、弘仁年中大極殿に最勝王經を講じ、淳和帝の天長四年（八二七）七十歳で寂したとあつて、求聞持法に就ては何等の記事はないが、これ三論と共に相傳したものであらう。孰れにしても當時求聞持法の行はれて居たのを知る資料とも見るべきは、「釋書」一六の元興寺神叡傳に

世言得^三虛空藏菩薩靈感^二天平九年化。（佛全、一〇一、^{三三三}）

とあり。又「七大寺年表」に

傳^三虛空藏驗、一切智者云々（佛全、一二、^{三三}）

等とあるは、何れも道慈歸朝後二十余年に當る故に、恐らく求聞持法の法驗を記したものであらう。今清澄の草創の寶龜二年は、天平九年（七三七）神叡寂後三十五年、天平十六年（七四四）道慈寂後實に二十八年、善議は四十三歳、勤操は四十四歳の時であつた。若し當時東國に於ける名利としては、下野の專仰寺、常陸の筑波山寺、陸奥の惠日寺等である。專仰寺は、淳仁帝の天平寶字五年（七六一）の草創で、東大寺、筑紫の觀世音寺と共に、當時日本三戒壇の一で清澄建立前年寶龜元年道鏡が配流せられた所である。他の二寺は共に傳教の法敵なる修圓の弟子徳一の建立に拘はり「釋書」四の徳一傳には

一、關^三常州筑波山寺、門葉益茂、乃至修^三慧日寺、全身不^レ壞。（佛全、一〇一、^{二八三}）
とあり、又「南都高僧傳」には

天長元年七月廿七日、自^三惠日寺、下^三常陸國、年七十六、徳一寺常陸國御建立、山寺名^三中禪寺（同上、^{五一九}）
といへば筑波山寺は又中禪寺と稱した様である。又「遊方記」二には

受業早成如_ニ常州_一居_ニ筑波山_一後移_ニ陸州惠日寺_一居焉。此寺師建_レ堂、安_ニ丈六藥師像_一、爲_ニ東夷之鎮砌_一者也。德一居而恢_レ道、東夷大得_レ化。(啓蒙、五、八四所引)

とあるが、その惠日寺は會津大寺とも、亦北嶺寺ともいひ、岩代國耶摩郡磐梯村にあり、筑波山寺は淳和帝の天長元年(八二四)、惠日寺は平城帝の大同年間(八〇六—九)の創立であり、寶龜二年清澄寺建立の三十余年後である。若し德一にして求聞持法に通じて居たならば、筑波山及磐梯山共に天空開闢、求聞持法相應の地であるが、虚空藏並に求聞持法に就ては何等知る由はない。併し乍ら「會津溫故拾要抄」に依れば

蜷川莊大會津郡、南岩坂虚空藏堂、僧德一建立。(地名辭書、三、六八九引)

といふのに依れば、會津岩坂の虚空藏堂が果して德一の建立とすれば、德一も或は求聞持に通じて居たのかも知れぬ。此の点は更に研究を要する。

若し弘法後に於ける求聞持法に就ては、大和の法輪寺が弘法の弟子道昌に依て求聞持法を以て開創せられたことが、大和の「法輪寺緣起」に詳である。

右寺者、道昌僧都之建立、勝驗無雙之靈地也。(中畧)道昌者、讃岐國香河郡人、弘法大師御弟子、俗姓秦氏、延暦十八年_巳卯三月八日誕生、弘仁三季十四歲自出家、從_ニ元興寺明澄和尚_一通_ニ達三論之大義_一九年_戌戊五月到_ニ東大寺_一受_ニ具念足戒_一年_二。天長五年_申戊申就_ニ神護寺僧都_一弘法大師登_ニ灌頂壇_一受_ニ眞言大法_一廿年_二然後爲_レ修_ニ虚空藏求聞持能滿諸願法_一尋_ニ求勝驗之地_一。大師教曰於_ニ葛井寺_一輪_{今法}寺可_レ修_ニ之_一仍同六年_巳巳西參_ニ範百箇日_一、修_ニ求聞持法_一同夏五月之頃、皓月隱_ニ西山_一之後、明星出_ニ東天_一之曉、奉_ニ拜明星_一波_ニ闍伽水_一之處、光炎頓耀、宛如_ニ電光_一恠_ニ而見_一之、明星天子來顯、虚空藏菩薩現_ニ袖_一、雖_レ經_ニ數日_一其体不_レ減、尊像儼然、異香芬馥。是則生身御体、奇特靈像也。誰緩_ニ欽仰之誠_一。於是道昌造_ニ

虚空藏形像二云々（佛全、一一七、三）畧引

とこれ正しく求聞持に依る法輪尋の縁起である。實に天長六年（八二九）の建立で、清澄寺建立（七七二）の五十九年後である。且つ建立後九年承和三年（八三六）正月廿一日應隆寺別頭を補したといへば、前掲廣隆寺の虚空藏は道昌の作といへば、此の人を指したことはないふ迄もない。

斯の如く此の頃に至つては、虚空藏の信仰又は求聞持法が、相當に行れはたことは事實である。

五、東國の三虚空藏

更に東國の三虚空藏に就て見るに、徳一の建立といふ會津の虚空藏堂縁起に依れば

昔空海入唐し青龍寺に於て文殊菩薩を拜む、其の時佛の曰く『今汝に佛樹三枝を授く、此木は日本三所の靈地に寄すべし』と、空海歸朝の後三枝の内本木は常州村松港に寄り、中木は房州清澄港に寄り、末木は越後新潟港に寄り岩坂邑農民あり、坂上覺之亟と云者、此木を見附け、空海に告ぐ、空海則ち川原に於て、虚空藏と賓頭盧、大日と四寸の金剛力士を刻み、徳一に附屬す、依て徳一寺塔を成就し、入佛供養し、菊光堂と名づけ、之を福満虚空藏菊光佛と稱す。但清澄は大満虚空藏、村松は能満虚空藏と號す。此等初め行人のみ住持せしが、至徳元年（南北朝時代一三八四）義乘法師の時、黒川興福寺の大主和尚に従ひ濟家宗に改む。之に依て大主を開山とす。（地名辭典、タカノ）とあり、此の縁起に依れば常陸村松の能満、安房清澄の大満、今の越後柳澤の福満を以て日本の三虚空藏といひ、且つ柳澤の虚空藏は新潟着の末木に依て、弘法之を刻み徳一に附屬したものである。然るに「清澄山縁起」に依れば寶龜二年不思議法師、一大柏樹を以て虚空藏を刻む

と述べ、又「安房國清澄寺縁起」（岩村義運著）には

現在本堂に安置し奉る不思議法師作の尊体は腹胎佛（立像にして五寸程の木像）にして、母体像は實に尾張國八事山遍照院興正寺の開山にして、徳川家康の血族として尊信せられし、天瑞大和尚一刀三体の御作にして、是れ常陸國村松山の虚空藏尊、會津の柳井澤の虚空藏尊と共に、日本三体の虚空藏菩薩として世に稱せられるものなりとあればこれ恐らく、會津の虚空藏堂縁起の所謂中木の房州清澄港に寄れるもので、不思議法師の作が腹胎佛で、母体佛は徳川時代の天瑞和尚の作で、同和尚の一刀三体作が日本の三虚空藏といふのである。若し常陸の村松（茨城郡大野村）虚空藏たる、鹽崎長福寺新志には

鹽崎長福寺は眞言宗、往古は水戸城江戸氏時の十箇寺の一たり、開山榮尊、嘗て村松虚空藏堂百日參詣の時、兩界曼荼羅、並に三千佛の繪五幅を拜受すと、曼荼羅に康永三年甲申八月とあり、今に藏す、又木佛の背に應永二年二月立とあり、是蓋建立成就入佛の年紀なり。（地名辭書）

とあるが、これは會津の虚空藏堂縁起に所謂本木に相當するもので、この造立の應永二年（一三九五）二月は足利時代の初期で作者も不明である。

如上の記事の意を綜合すれば、日本の三虚空藏は各別の時代に、各別の作者に依て造立せられたことになり、隨つて上述の記録だけでは、何等史的關係は認められないのである。

孰れにもせよ所謂日本三虚空藏に就ては、果して清澄山の草創を縁起にある如く、寶龜二年不思議法師なりとすれば、日本三虚空藏中最古のものであり、清澄寺の開創は安房國清澄寺縁起にある如く

時は今（昭和五年）を距ること一千百六十余年の昔、人皇四十九代光仁天皇の寶龜二年、一人の旅僧何地よりか飄然として此山に來り、一大柏樹を以て虚空藏の尊像を謹刻し、一字を此處に建立し、日頃禮拜供養怠らず、人の來

りて加持祈禱を乞ふ者あれば、快よく諾し然も必ず驗あり、里人其生國氏名を問ふに笑つて應へず、暫らくして忽然何地へか去つた、復た行く此處を知らず、時の人此の不思議なる行動と不思議なる法驗とに因みて、此の僧を呼んで不思議法師となす。是れ清澄山の草創にして、此の堂の傍に淨池あり、清く澄めること鏡の如し、此の山の古歌に
みきはには立ちもよられず山賤の

影はづかしきよすみの池

とあるに因んで、寺の名を清澄寺と名付け、常に妙光を發するを以て、山號を千光山と稱せり。

といふ、寔に彷彿たる神話的の開創といはねばならぬ。併し乍ら求聞持法の本尊たる虚空藏を以て本尊とする事實は嚴として動かぬのである。

六、求聞持法と清澄山

清澄寺の本尊が虚空藏で、此の寺の草創が東台兩密中孰れかに屬して居たことは異存のないことであらう。これに就て往年清水梁山師が存命中、清澄山は眞言の曼荼羅に形取つてあるといつたを聞いたことがあるが、既に虚空藏を本尊とするに於ては、當山と求聞持法との關係を研究する必要がある。

前述の如く求聞持法は金剛頂經十八會の第一會の成就一切義品に依る秘密儀軌で、聞法を求めて一切義を成就せんとする秘法である。即ち見聞覺知の事を憶持して、長く忘失せざることを欣求する爲に修する秘法である。されば恒落學成就相應義には

師なくして天地の感應を待つ、之を指して求と稱し、教なくして眞如の理を覺る、之を以て聞と名づく、一度知ることを以て永く忘れざる、之を呼んで持といふ。

と述べ、若し無畏譯の求聞持法に依れば、絹素白氎又は淨板の上に先づ滿月を畫き、中に虚空藏菩薩の像を圖し、空閑寂靜の處、又は淨室等に之を安置し、面を正しく西面に向はしめ、或は北に向ひ、淨物を以て之を覆ひ、別に一の方形の木壇を造る、壇下に四足を案じて之を像前に置き、五種の佛具を辨じ、淨水を以て手を洗ひ、手印を作して水を承け、陀羅尼を誦して之を飲み、次で像前に詣つて至心に禮拜し、像上の覆物を去り印を結び、陀羅尼を誦し、運心供養し、手印を以て珠を掐りて陀羅尼の數を明記することを述べ、悉地成就に就ては

若し聞持を獲て一たび耳目に經れば、文義俱に解し、之を心に記して永く之を遺忘すること無く、諸余の福利無量無邊ならん

といふのである。

若し修法の壇場の事に就ては、覺禪抄第四の菩薩部の下の求聞持法の下に

壇場事、軌云於ニ空閑寂靜之處、或在ニ淨室一塔廟山頂樹下、隨在ニ一處一安置其像、云々（佛全、四八、九〇）

に示す所であるが、若し擇地に就ては阿沙縛鈔百四の求聞持の下に

擇地、殊擇ニ閑靜處ニ可レ修之云云

示云、四望無極地爲勝、日月清明故歟。（佛全、八、五二）

となるに依れば閑靜の處で、且つ四方の無極の地を必要とするに就ては、覺禪鈔第四の求聞持法同異說の下、「拜ニ日月一有ニ成不成相一事」に就て

又云、實任云、見ニ悉地成否思、香火置、明星奉レ拜、四方暗星不見、悉地不成。文 暗星現下品悉地成、四方少々暗星現、中品悉地成。又天無レ暗暗星現、得ニ上品悉地。又四方雖レ暗星不見者、悉地更不成。文（佛全、四八、三〇）

とある如く、求聞持を修せんとせば平地よりも山上、又山上に於ても修法の口傳に依れば「此法を修するには東南西方の晴れたる處を最上とす、東方のみにても不可なし」〔密教大辭典^{四五六}〕といふことになるのである。

若し如上の實例ともいふべきは享保二十一年に下野足利鑓阿寺普門院の諦觀の筆に成る。足利鑓阿寺縁起に

夫爲_二當莊地景_一也、渡瀬當_二前_一、少水在_二東_一、東南西方、遙_二見數百里_一、北千山萬嶽連_二數千里_一、仁山智水周備也。冬暖夏冷土厚水淨、百穀豐登、是故行基菩薩、小野篁、先_レ既住_レ是云々〔佛全、一二〇、^{九四}、寺誌叢書第四〕

とあるは、正しく東南西の三方開明で、且つ閑靜の地なること文に明かである、且つ求聞持法所修の道場の要件に一致するものがある。

我等は如上の求聞持法の道場としての要件を以て、今の清澄山を見るならば、ゆくりなくも北方に山を負ひ、東南西の三方開明の靈地である。随つて不思議法師なりや何人なりや且く措き、清澄山は求聞持所修の道場としては、こよなき靈地なることは、一度此の地を踏んだ誰人も思惟せらるゝ所である。果せる哉、該山の岩村義運師はその著「旭森考」に

山上「旭森」の麓を舊「求聞院」の所在地とす。慈寛大師此處に於て求聞持の法を修して、伽藍を復興し、云々〔清澄師反對吾祖大士^{五七}〕

と述べて居るが、右の所論中果して旭ヶ森の麓が道場の跡なりや、將又慈寛大師が復興せしやは必ずしも肯定出來ないとしても、清澄山が求聞持法の道場なりしことは動かし難き事實であり。求聞持法の本尊たる虚空藏菩薩が清澄の本尊なりしことも動かし難き事實である。

然らば求聞持法の本尊たる虚空藏菩薩は立像なりや坐像なりやといふに、求聞持法に依れば

身作金色、寶蓮華上、半加而坐、以_レ右厭_レ左、容顏殊妙、作_二熙怡喜悅之相_一、於_二寶冠上_一有_二五佛像結加趺坐_一菩薩左手執白蓮華、微作紅色、於_二華台上_一有_二如意寶珠、映琉璃色黃光發陷、右手復作_二與願印_一、五指垂下現掌向外、是與願印相（20—602）

となるに見れば、結跏趺坐の坐像である。然るに覺禪抄第四の求聞持同異説には

諸師云、法輪（寺）虚空藏、求聞持本尊也。（佛全、四八、_{ハ、セ}）

といへば諸師の傳には前述の大和法輪寺の像の如き立像なりといふのである。斯の如く立像、坐像孰れとも一定して居らぬ様であるが、孰れにしても求聞持法の本尊は虚空藏菩薩なることは動かぬのである。

若し清澄の虚空藏菩薩に就ては、前述の如く清澄寺縁起に依れば、不思議法師の作で、且つその像は天瑞和尚一刀三体の、日本三体虚空藏の腹胎佛として現存することであり、本年七月四日同寺執事の書面には

本尊虚空藏尊は御立像にて五寸程の木像に候。

と回答せられたものであらう。尙ほ他の方面に於けるこの事實を傳へたものとしては、禪智日好の「録内拾遺」に依れば正徳元年（聖徳四二九）東都深川八幡の宮地に於ける清澄寺靈寶開張拜觀の事を記して、時に同寺の縁起並に宗祖三枚繼の本尊と共に開山不思議法師作の虚空藏を拜せる事實を述べて

本尊虚空藏菩薩長五尺斗、木像而大古也。面相不_二分明_一、左手捧_二如意珠_一、右手垂開_レ掌（施無畏印？）開山不思議作也。乃至予至_二彼地_一親聞_二縁起_一錄茲。但本尊虚空藏之像、隔_二間拜故不_二分明_一。（七三）

とあるがそれに依れば、身長五尺計といへば、所謂不思議法師作のものとは全く別である。山川氏の「日蓮聖人の研究」（一、二〇）に依れば、清澄寺は嘉保三年（一〇九六）以來、天文四年（一五三五）、天正十六年（一五八八）元祿七八年

(一六九六)頃等數回の火災があつたといへば現存の不思議法師作の腹胎佛も不明である。日好の深川開張の正徳元年(一七一二)拜觀の五尺計の古像も、元録火災に焼亡を免れたとしても、所謂天瑞和尚(貞享三年^{一六八六}高野より來つて尾張に興正寺を開き元祿初年當時在住した)一刀三体の母体像なりしや否やも不明である、随つて確實なることは本尊が虚空藏であつたこと以外は、作者やその他の点に就ては何ともいひ得ぬのである。

更に佛像に關聯して一言したきことは、清澄山緣起(地名辭書^{三一}引)に

上古神武天皇の御宇、天富命を祀りし靈場なる故に、今寺の本堂の紋、三つ玉を用ふ

とあり、山川氏は「日蓮聖人の研究」(一、二〇〇)に「古語拾遺」を引いて、必ずしも忘誕の説ではないといひ。又岩村師は

「安房國清澄寺緣起」に清澄の八名山を掲げて

第一摩尼山^{一千二百}七十三尺。第二寶珠山^{一千二百}十五尺。第三意如山^{一千}十七尺。

以上の三山は開基不思議法師秘藏の寶珠三顆を、本堂周圍の三山に納めしもの、今此寺を摩尼殿と呼び、山號を千光山と稱し、院號を金剛寶院と唱ふるは之に起因し、又定紋の寶珠も之に根源を發したものの、(三七)

といへるは全く根據なき憶測である、然るに次の文に

蓋し本尊御所持の寶珠に悉く關聯せるものなり。

と決せる如く、本堂の紋の三つ玉は、これ胎藏界の虚空藏の左手蓮華上の寶珠、虚空藏曼陀羅の中尊右手心上の寶珠、八大菩薩曼荼羅並に、醍醐三寶院の虚空藏の左手心上の寶珠が何れも三つの寶珠であり、之を三瓣又は三顆の寶珠と稱して、虚空藏菩薩の大定、智、悲、或は理、智、悲の三德を表したものである。随つて清澄寺の本堂の紋は、三つ玉を用ゐたのは、天富の尊との關係は別として、虚空藏菩薩の三德を表したる如意寶珠と見るのが當然である。如上の冊

實は清澄山と求聞持法との關係といはんより、清澄山が求聞持法に依り建立なりといふことは、恐らく唯人も疑ひ得ぬ所でなからう。

後篇 草創史の研究

一、不思議法師の草創説

清澄山を以て不思議法師の草創と見ることは、古來より殆んど異論の無い所である。即ち清澄山縁起に依れば光仁天皇の寶龜二年、不思議法師といふもの此の山に來り、一株の老柏樹を以て虚空藏を刻し、假に小堂をむすびて安置するを寺の草創とす。後承和年中、慈覺大師來りて、更に不動明王の像を刻して祀る、のち堀河帝の嘉保三年、雷火に罹つて伽藍燒失し、國司源親元これを再建す。(地名辭書^{五三}引用)

といひ、又禪智日好の清澄寺御書の「拾遺」には

清澄寺キヨスミテラト呼ブ、澄ノ字清テヨム也。山號云ニ千光山、光仁帝御宇不思議法師、寶龜二年開基。至正徳二年、九百七十八年也。慈覺大師は中興祖也。本尊虚空藏菩薩云々(七三)

等といふもので、不思議法師開創、慈覺大師中興といふが、古來よりの定説となつて居るのである。

若し清澄寺の宗旨に就て、同寺を以て東密即ち眞言宗となす記録としては、延文五年(一三六〇、聖滅七八)以前の偽作たる、「本門宗要鈔」に

延應元年己亥十月八日、生年十八歳時、得_ニ出家_一已。師匠奉_レ值_ニ道善御房、習_ニ學東寺眞言_一。(「他受用御書」二五左)

とあるを始として、聖滅二百年代の本成日實の「宗旨名目」(寛正二年以後なること、同書上に^{三九}に應仁元年日近

作「叡山戒旦問答用意鈔」を引用するに見て明かである。崎報、七三、二。八四、二三。参照)の「東寺流真言宗」(上、三)、聖滅二二八年日澄の「註畫讀」の「學真言於道善房三年」(一、二四)、又聖滅四三四年日省の「高僧傳」の「受真言教」(上、三)等は、孰れも「宗要鈔」に依り、不思議法師の草創と否とに關せず、單に宗祖の出家當時は清澄寺が、真言なり、東密なりと述べたものである。

然るに日省と粗ぼ同年の日好(聖寂四三六)は、前引の如く正しく寶龜二年不思議法師の草創を述べ。次で聖滅四九八年建立日諦は「高祖年譜」二に「稟密乘」と述べしを「同攷異」には、宗要鈔を引き、又拾遺の説に依り

寺山曰「千光寶龜三年辛亥、不思議法師創之」至安永八年一慈覺大師爲中興元祖化。讚鈔註畫。國字傳運公行並曰

慈覺開基。蓋傳聞之失。本尊虛空藏開祖八十年前失火。像與殿毀、故改刻其像而置之、安永甲午三年秋、健

(健立日諦)上其上(上)

と矢張不思議法師草創の説をなし。安永三年親しく登山してその説を證した様である。次で聖滅四九二年日導は「祖書綱要」に上來の諸説を綜合して、

十二歲登同郡清澄寺、初習學真言宗、彼山光仁帝人皇四十九代寶龜二年不思議法師所開闢、以慈覺大師古中興之祖拾遺

三(三)三左、「刪畧」一三(同意)

と述べて居るが、大体「拾遺」の説に依つたことはいふ迄もない。更に最近に於ては筑後の藤原日臣師の「清澄寺に登る記」に依れば

彼の山は人皇四十九代光仁帝の御宇寶龜二亥年の創設にして、開山は不思議法師なり。則ち今を去る千百三十年前なりき。後嘉保三年雷火にて燒失し、其時に建立せし堂宇爾來八百年余の久しきも、今猶現在せり。然るに該寺は

開基の當時より天台宗なりしも、徳川の始めの頃に至りて眞言宗に改轉し、本尊は虚空藏菩薩にして、昔より本堂に安置し、別に鎮守とするにあらず。(『日宗新報』革新二四四號、「双榎學報」二、二)

と記されて居るが、右の文の他に異なる所は、「該寺は開基の當時より天台宗なり」といへる点である。併し乍ら此の点を除けば、上掲の記述の意は清澄寺は人皇第四十九代光仁天皇の寶龜二年、不思議法師が虚空藏菩薩を本尊として草創したといふに歸し、且つ虚空藏菩薩を本尊とすることは、自ら求聞持法を修せし道場となるのである。斯くて六十余年後の第五十四代仁明天皇の承和の頃、慈覺大師が來つて不動明王を刻んで安置し中興となり。更に二百五十余年後第七十三代堀河天皇の嘉保三年、雷火に依て伽藍を焼失し、國司の源親元がこれを再建した。其後百三十余年後第八十七代四條天皇の天福元年、宗祖が此の山で得度せられた頃も、虚空藏を以て本尊として居つたが、宗旨は台密であつたことは清水師の研究で明かである。斯くて百五十余年後第九十八代後龜山天皇の元中九年(一三九二)即ち明德三年の古鐘銘に依れば、當時は東密の弘賢に依て管掌せられて居つたが、徳川時代に至つては新義眞言となり、今日に至つたことは、山川氏の研究に明かである。

二、不思議法師の研究

然らば清澄山を開いた不思議法師とは果して如何なる人なるやといふに、清水師は既に「清澄寺師友對吾祖大士」の中に於て、

開基不思議法師は、氏族等を詳にする由なし、「大日本佛家人名辭書」等を検するに見えず。同山の縁起に據るも「其來する所を知らず、人叫んで不思議法師と稱す」云々、といふ。蓋し役小角の亞流にして、修驗道山伏歟、寶龜二年辛亥は四十九代光仁帝の御宇にして、東台兩密の傳來(台密は延暦二十四年傳教歸朝、東密は大同元年弘法歸

朝)に先つこと三十四年、即ち南都六宗の時代なり。本尊虚空藏菩薩は、彌陀、觀音、彌勒等と共に、奈良朝時代に尊信せられし所なり。(四四)

と述べ。先の「清澄寺宗旨考」には

光仁帝は孝謙帝の同母妹にして、道鏡の嬖幸せられたる際なれば、或は法相宗(道鏡は同宗の義淵僧正の資なり)なりしや知るべからず。桓武、平城、嵯峨、淳和を経て、五十四代仁明帝の承和九年六月慈覺入唐、同十四年に歸朝し、尋で五十五代文徳帝の仁壽四年に叡山第三の座主となれり。想ふに彼が中興となりしは、其後たるべし。(「双榎學報」二、九九)

と述べて居るが修驗道なりや、法相宗なりや知る由はない。

何れにもせよ當時に於て一寺を建立せるとせば、相當の地位學歷のあつたことはいふ迄もない。又一説には法師といはずして律師(藤原日臣師稿)とあるが、果して法師といはずして律師なりとせば、光仁帝當時の「僧綱補任」等に見ゆるが當然である。當時の「僧綱補任」に依れば、僧正、大僧都、小僧都、大律師、中律師、律師の七階に分たれて居り、若し大僧正に至つては、先には行基菩薩一人のみである。若し當時の律師以上の僧綱は、「興福寺叢書」第一の「僧綱補任」六卷、「七大寺年表」等に詳記せられて居る故に、試みに惠珍の「七大寺年表」に於ける、光仁帝の寶龜二年(七七一)の條を見れば

寶龜二年辛亥

同 帝

僧正、良辨。大僧都、圓興。

小僧都

法進

慈訓

興福寺
別頭

慶俊

律師

弘耀

大律師

基眞

去職今年有し事
被ニ廢流ニ云々

安寛 去職

中律師

標瓊

去職

善榮

永嚴

(佛全、一一一三六)

とあり。又「僧綱補任」(佛全、一一三、二〇)も粗ぼ同一ではあるが、内容は多少粗畧である。

右の如く當時の僧綱にもその名は見えぬのである。若し道鏡の如きは清水氏のいへる如く、「年表」に依れば孝謙帝の天平寶字七年(八年前)始めて少僧都に任ぜられたのである。若しその註に

河内國人、弓削氏、天智天皇孫志基親王第六子也。義淵僧正弟子、初範葛木山修如意輪法、苦行無極。高野天皇聞食之、於近江保良宮有御藥、仍召道鏡被修宿曜秘法殊有驗。被平復仍被任少僧都。(佛全、一一一、三三)

とあるに依て、當時密修の中如意輪法、宿曜秘法等の行はれたことも明かである。且つ今の文に依れば道鏡は天智帝の玄孫であり、隨つて單なる臣家でなく皇胤であつたのである。これ先年久米博士等の道鏡皇胤論の典據であらう。又此の年豎眞和尚も律師に任ぜられたのである。翌年道鏡は大臣禪師となり、更に翌天平神護元年には大政大臣禪師となり、翌二年法王位を授けられたが、光仁帝の寶龜元年には下野の藥師等の別頭として配流せられ、三年配所に於て入滅したのであるが、當時の律師の中には不思議の名は見えぬのである。又東國の寺としては當時下野の藥師寺は東國の戒壇院で有名であつたが、他に比すべき名利も無かつた様である。

更に翻つて當時の眞言は如何といふに、唐の玄宗の開元四年（七一六）善無畏三藏が始めて長安に來り、同八年金剛智、不空が相次いで洛陽に來り、十一年（七二三）金剛智始めて「金剛頂經」四卷を出し、十三年（七二五）無畏「大日經」七卷を出し、十四年更に「蘇悉地經」三卷を出したのである。且つ前出の大日經の譯後無畏が一行のためにこれを講授し、それを筆録したのが「大日經疏」二十卷である。然るに十五年未だ再治に至らずして寂した、故に弟子智儼、溫古等が再治したのが「義釋」十四卷で、前者は東密、後者は合密の依用する所である。而して大日經第七の供養法に就ては、新羅の僧不思議法師が、無畏の口説を聞いて疏二卷を作り、世にこれを不思議の疏ともいふのである。併しその製作の年月は判明せぬが、一行と粗ぼ同一時代と見るべきであらう。即ち同疏に依れば大意、來由、題目、隨文の四門に約して供養法の卷を解し、第二來由の終に

所謂小子者、厥號_二善無畏三藏和上_一、即是小僧不思議多幸、面_二諮和上_一、所聞法要、隨分抄記。（39—50）

とあるに依て口説の筆録なること明かである。又下卷の最後に

又可_レ云、甚深無相法劣慧所_レ不堪、爲_二應_レ彼等_一故兼存_二有相說_一、此文造人新羅國零妙之寺釋不思議、隨分穿鑿顯_二此

文見_二獨知_一於本不生理中證（39—807）

とあるが、此の不思議は新羅の零妙寺の僧といふ外知る由がなく、又佛者中不思議なる名は我草山の政公の外、未だ寡分にして無畏の弟子新羅の不可思議あるを知るのみである。

而して此疏の述作を粗ぼ開皇十五年（七二七）とすれば、光仁帝の寶龜二年（七七二）に先づこと五十年で、此の疏は仁明帝の承和六年（八三九）圓行の「靈嚴寺和尚請來目錄」（35—1071）には見えないが古來より圓行請來と傳へる。且つ當時慈覺大師は入唐後恰かも第二年に當るのである。且つ此の承和とは清澄寺緣起に所謂承和年中慈覺再興の年に當

るのであるが、慈覺は在唐十年である故に、此の間慈覺が清澄を再興する譯はない。若し「元亨釋書」に善無畏の傳を出し

吾元正帝養老之間來此土、時機未稔、利導無聞。(佛全、一〇一、^四、^五)

と述べ、古來或は無畏の來朝の事ありと傳ふるも、史上何等の事實なく且つ次下に

世言無畏禪毘舍那經入我國時、乏資稟藏和之久米寺而去。後七十年空海遭靈感得此經、若無畏不將來、此邦爭有此經乎。(同上、^五、^四)

とある如く、弘法入唐以前既に大日經の傳來があつたのを、譯者の來朝の誤つたのであらう。「傳通緣起」下に

開元四年善無畏來、乃至善無畏三藏來朝之年、雖無記錄、應是聖武天皇御宇神龜季曆天平初運。(佛全、一一一、^三)とあるも同一意に外ならぬ。

斯の如き無稽の傳説あるよりして、若し清澄山の草創を相當の人に求むれば、或は後人此の無畏の弟子不思議を以て配したものか、又は清水師の如く全然無關係の所謂修驗者流に同名の人のあつたのであらう。さなくば後人漠然と不思議法師なる人を毀造して、清澄の開山に配したのであらう。我等は前述の無畏來朝説あるに依り、今の不思議をして清澄の開山に隅したとも見られる。若し彼の「大日經供養法次第疏」下には

次釋虛空藏轉明妃眞言門、經曰爾時如來復說虛空力、虛空轉明眞言者、猶如虛空不可破壞一切無能勝者、故名虛空藏力。又藏者如人有大寶藏、隨所欲者自在取之不_レ受貧乏、如來虛空藏亦復如是、一切利樂衆生事皆從中出、無量法寶自在取用而無窮竭、故名虛空藏也。轉明者轉是能生之義能生此藏、能生一切佛事也(39—799)とは大日如來を「不可破壞一切無能勝者」「無量法寶自在取用而無窮竭」の虛空藏と讃歎し。又等虛空、理虛空の語を用

ゐて讃歎するに見れば、不思議疏は大日如來を以て、虚空藏と釋成した点に於て、虚空藏菩薩とは思想的には何等關係はなく、又これを以て今の不思議を清澄の開山と推す理由は毫もないのである。故に若し不思議法師なる人が果してあつたにもせよ、左程の人ではなかつたのであらうし、或は全然居らなかつたかも知れぬ、更に研究を要する。

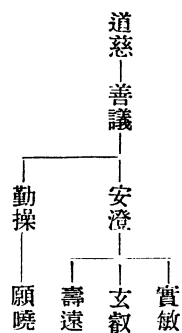
三、慈覺大師の草創説

上述の如く清澄山の草創は、不思議法師と傳へるが新羅の不思議法師でないことは明かである。随つて縁起にいふ如く不思議の行動と法驗に依る一族僧の草創となるのであるが、併し動かし難き事實としては虚空藏菩薩を安置する求聞持法の道場なることである。又寶龜二年が果して草創なりや否やも判然しないのである。故に「房總志料」には

光仁帝寶龜二年、當時創立と傳ふ。想ふに是頃よりして、虚空藏を置きしと見ゆ。(「地名辭典」^{五三})
と述べた所以である。然るに次の慈覺中興に就ては「安房國志」に

承和年間慈覺大師亦來り、不動明王の像を刻す、今猶ほ寺中に存す。(同上)

とあるが、此の不動明王云々は他の記録に見えぬ故に、清澄の本尊は虚空藏とすれば、いふ迄もなく求聞持法の本尊である。而して求聞持法は元正天皇の養老二年(七一八)道慈に依て傳へられ。その後善議、勤操を経て弘法に傳はり更に弘法は大同元年(八〇六)入唐再び相傳したといへば、寶龜二年(七七二)に我が國に求聞持法の傳來して居つたことは事實である。而して清澄の開創が果して求聞持法とすれば弘法再傳歸朝前である、隨て道慈相傳のものでなければならぬ、且つ道慈の弟子善議^{八三七}。又はその弟子勤操^{八二七}の相承のものでなければならぬ。然るにその年代より見れば善議と同一時代に屬する故に、若し果して不思議法師なる者ありしとすれば善議の弟子といふよりも、道慈の弟子としなければその時代に齟齬する。今道慈の弟子に就て見れば



左の如く別に不思議の名は見へぬし、又よし道慈の弟子に不思議法師なる人ありとするも、更に求聞持法の相傳早々無名の法師に依て、東方の邊國にまで弘通せられたとは考へられぬ事である。

故によし不思議法師に依て清澄が草創せられたにしても、求聞時法を以て開創したことは信じ難い。随つて果して虚空藏を本尊とせしや否やも怪まれるのである。されば岩村師は「新縁起」の寺門の變遷の下に

不思議法師開創當時の清澄寺は、極めて微々たる山寺に過ぎざりしが、其の後六十余年を経て、仁明天皇の御宇承和三年慈覺大師東國巡錫の砌、清澄に登りし處、聞きしに優る仙境に讃嘆禁ぜず、之に佛法相應の靈地なりとし、錫を止めて興隆に力を盡し、自ら一草堂に籠りて、虚空藏菩薩求聞持法を嚴修して其成滿を祈り、遂に僧坊を建つること十有二、詞殿を造ること二十有五、房總第一の巨刹、天台有數の大寺となり。清澄寺の名、漸く世に知らるゝに至れり。

と述べし如く、不思議法師の草創は甚だ彷彿であつて、慈覺大師求聞持法を以て相應の靈地として開創せし如き文勢である。而して此の文勢に最も有力なる根據を與へたのは、清澄山に傳はる明德三年（南朝元中九年、一三九二）の「古鐘銘」である。即ち

房州千光山清澄寺者、慈覺大師草創、往昔有鐘、破壊久焉。何以驚睡眠止酸苦。行脚比丘惠闇、參禮虚空藏大

士、次欲_レ發_二大心_一補_二此缺_一。遍募_二衆緣_一成_二就其切_一。仍作_レ銘曰、

陶鑄金剛、成大冶功、寅夕鯨吼、洪音湧空、

響遍高低、啓昏導迷、禮樂既盛、號令共齊、

上窮碧天、下徹黃泉、赴齊出定、得句悟禪、

梵宇繁昌、國家安康、檀信有慶、聖壽無疆、

明德三季壬申八月 日、

當寺主 前大僧正法師大和尚 弘賢。

檀那 源朝臣 清貞。幹緣比丘 明了

勸緣比丘 惠闇。大工 武州塚田 道禪。

とあるがそれである。

右鐘銘に依れば諸説に中興となす慈覺大師を正しく草創となし、本尊として虚空藏を上げて居るのである。更に右と同一の説を爲したのは吾が行學朝師である。師は「先祖化導記」(永享十年、一四三八)上に

或記云、清澄寺慈覺建立處、本尊虚空藏菩薩也、明星池トテ于_レ今在_レ之本地垂迹意趣顯見たり。

と記し或記を採用して自説としたものである。而して此の或記とは果して何物を指すか不明であるが、右鐘銘後四十七年を経る故に恐らくは今の古鐘銘に依つたのであらう。更に此説をその儘借用したのが、寶曆五年(一七五五)化した圓明日澄の「註畫讃」の鈔を書いた、京都昭宮寺の日收である。「註畫讃」一の鈔に同文を引證して居るのがそれである。これ朝師後恰かも三百余年に當るのである。更に二十五年の後の元錄八年(一六九五)全く他の方面より此の説と

爲したのは啓蒙講師である。師は報恩鈔の啓蒙に於て眞言家が、慈覺智證の理同事勝の義を利用して、天台の寺房を奪取したことを

今日東國の眞言の大地古跡多分藥師山王(天台の本尊と守護神)あり、これ本天台宗なりしが、中古より眞言宗となるが故なり、(一四、頁〇)

と述べ、次でその實例を掲ぐるに至つて

房州の清澄も慈覺建立の寺にて、天台宗なりしが、中比より高野の末寺となれり。(同上)

と述べて居るが、此の説は果して何に依つたか不明であるが、台密が東密の寺となつた實例とした点には、相當の根據がある様である。此の啓蒙の説に對して清水師は「清澄師友對吾祖大士」の第三節清澄寺は天台眞言の頃に於て前掲の古鐘銘に依て

本と東寺流の眞言宗なれば慈覺中興の理なし(六二)

と暗に慈覺の草創をほのめかしつゝ、今の啓蒙の「慈覺建立」を「中興の誤」と註して居るが、これ恐らく啓蒙師を強ゆるものである。又その後約八十年安永八年(一七七二)水戸の建立日諦は「年譜攷異」に

不思議法師創立、慈覺大師爲_ニ中興_一(化導記)、讚抄(註畫讚抄)、國字傳並曰_ニ慈覺開基_一(上六)

と化導記、註畫讚抄、國字傳(註畫讚に和漢兩字本がある和本が)等の説を出して又慈覺創立説に讀して居る。随つて本宗の先師は概ね慈覺創立説に依つて居る様である。

上述の中化導記の或記とは果して何であるか、又啓蒙は何に據つたかも不明であるが、恐らく同一系統の資料に依つたのであらう。孰れにもせよ慈覺創立説の最古のものであり、且つ信憑すべき條件を備へたのは弘賢の古鐘銘であ

る。何となれば弘賢は山川氏の研究に依れば眞言宗醍醐三寶院の名匠で、若し「鶴岡八幡宮寺社務職次第」に依れば、文和四年から八十六歳の應永十七年まで五十六年間。清澄寺の別頭職に居り。その他箱根、走湯山兩權現を始め、前項に述べた月輪寺、鑲阿寺等關東十余所別頭職を兼ねて居つたのである。且つ文和四年（一三五五）即ち聖滅七年以來弘賢は清澄の別頭であり。且つ就任より三十八年目の明徳三年（一三九三）聖滅一一〇年に。比丘東閣の發願に依り檀那源清貞、比丘明了の力に依て梵鐘が出来、時の別頭前大僧正法印大和尚弘賢の鐘銘が刻されたのである。而してその初に「慈覺大師草創」とあつて、決して從來の傳説の如く中興はないのである。勿論當時宗派の問題は後世の如く嚴確でなかつたにもせよ、傳教と弘法とは法義の上に於て對立し、就中慈覺の如きは「大日經中心の弘法の東密に對して金剛頂經中心の台密の祖であり、理同事勝の内容は弘法の九顯一密の說に對し、傳教の三權一實に法り三顯一密の義をなし、殊に晩年には顯揚大戒論を著して傳教の圓頓戒を顯揚したのである。就中安然の如きは「教時問答」第二に於て、弘法の十住心教判に對して五失（一、違_二大日經及義釋。二、違_二金剛頂。三、違_二守護經。四、違_二菩提心論。五、違_二衆師說。75—403）を掲げて、且つ四一十門の教判をなして、義釋の一大圓教論を天台の法華開會の意を立脚して大成した如き、台東兩密はその流れ截然として格別である。随つて後流安ぞ先匠の流を混するが如きことがあらう故に清澄寺にして果して東密の不思議法師創立とすれば、東密の弘賢が台密の慈覺を以て或は中興と讃し得るも、「草創」の祖と仰ぐ筈はあり得ぬのである。故に弘賢は鐘銘に創立の事實を如實に記したものだといはねばならぬ。啓蒙は清澄寺は台密の慈覺草創の寺であり、且つ宗祖當時も台密の寺であつたのを、中比弘賢の頃より東密となつた事實を指摘して

今日本國の眞言の大地古跡多分、これ本天台宗なりしが、中古より眞言宗となる故なり、房州の清澄も慈覺建立の

寺にて、天台宗なりしが中頃より高野の末寺となれり

と述べて、清澄寺の草創の事實を明示したものである。故に古來より清澄相傳の不思議法師草創説は、恐らくは前掲大日經供養法卷の疏の著者不思議法師の名に假托して、草創を慈覺以上に操り上げ、中頃東密となれる事實を覆はんとしたものではなからうか、これ上述の意の示す所の結論の様に思はれる。

四、慈覺大師東國傳道の史實と遺跡

慈覺大師の入唐求法の史實は、大師の「入唐求法巡禮記」四卷に詳である、且つこれに依れば求法の順路等に就ては元享釋書等の記事は多少の誤があることも明であるが、若し東國傳道の遺跡に就ては今日隨所これを傳聞するが、傳道の事實を傳ふる史實に乏しいのである。先づその一史實としては、宗性の「日本高僧傳要文抄」第一に依れば弘仁七年、

先師有_二本願_一欲_レ書_二寫_二二千部法華經_一、率_二弟子等_一赴_二向上野下野_一果_二願已畢_一。(佛全、一〇一、一三)

と記して傳説の所願を果たすために、二千部法華經を畫寫して、上野下野の地に法華經を納めて願を果したとあるはこれ大師の弘仁末の東國傳道と見べきである。更に

大師弘_二法此山_一（比叡）未_レ有_二外化_一、不_レ如下_二普向_一諸方_二廣利_一有情_一。大師雖_二固辭讓_一不_レ忍_二重請_一、強出_二山門_一今歲天長五年也。其夏法隆寺講_二法華經_一乃至自後遙向_二北土_一、弘_二暢妙典_一。(同上)

等とあるに依れば、天長の初の東國傳道を傳ふるものである。隨つて大師は入唐前弘仁、天長の交東北地方に行化したことは程度に信じ得られるのである。これ東國傳道の史實であるが、現にその遺跡として傳ふるものは、東北の名刹の大半で孰れも大師を以て草創の祖として居るのである。今且らく手元にある記録に徴するに左の如くである、

- (一) 松島瑞巖寺、五十三代淳和天皇、天長五年(八二八)開創(同寺畧傳)
- (二) 山形立石寺、五十六代清和天皇、貞觀二年(八六〇)開創(同寺沿革)
- (三) 中尊寺、五十四代仁明天皇、嘉祥三年(八五〇)開創(平泉志)
- (四) 平泉毛越寺、(同上)

等でこれ筆者の親しく巡拜した所であるが、「若し立石寺沿革」に依れば、大師の開創若しくは中興に係はるものとして

武藏の淺草寺、黒子の千妙寺、仙波の喜多院、下野の日光山、陸前の松島、平泉の中尊寺、並に毛越寺、恐山の圓通寺、膽振の大白山の如き。又本縣にては二色根^{じろね}の藥師寺、千歳山の萬松寺、山形の柏山寺、羽黒の寂光寺、吹浦の鳥海山等ば其主なる者

と記して居るが、斯の如く東北の名山巨刹は概ね大師の開創に拘はるのである。これ等の事實よりして清澄寺を以て大師の草創となすことは、必ずしも偶然ではない様である。

要するに前項に述べた如く清澄山は、その地相よりして求聞持法の道場として無二の地であり、且つ新縁起には「承和三年慈覺大師東國巡錫の砌清澄山に登り、佛法相應の靈地なり」といふはその事情を裏書き、更に「虚空藏求聞持法を嚴修して其成滿を祈り」といひ、「旭森考」には「慈覺大師此處に於て求聞持の法を修し」等とあるのは、求聞持法所修の道場なること明かである。東北諸山の草創の遺跡といひ、東密弘賢の鐘銘といひ、我宗先匠の説等に依て、求聞持法に依り虚空藏を本尊とする慈覺の再興にあらずして創立と考ふるものである。

若し本邦の求聞持法に就ては既に兩傳を出したのであるが、慈覺入唐前既に仁明帝の承和五年(八三八)入唐以前、

既に道慈等の同法があり、又平城帝の大同元年（八〇六）弘法相傳のものもあり、且つ大和の法輪寺は弘法の弟子道昌の求聞持法に依る草創なることは前述の如くなる故に、當時の台密の學匠たる慈覺にして此の法を知らざることは無い筈である。又承和十四年慈覺歸朝上申の「入唐新求聖教目錄」に依れば

大虚空藏菩薩念誦法 一卷（55—1079）

大虚空藏菩薩所聞經 八卷（55—4083）

唐梵兩字虚空藏菩薩讚 一卷（55—1086）

等が見ゆるのみならず、當時無畏不空の後を受けて密教隆盛を極めた彼地に十教年間留學求法した大師にして、元政義眞、法全、實月等の名匠より、必ずや此の法を相傳したであらうが、清澄關係の文書に承和三年、若しくは承和申といふに依れば、大師清澄開創は東國傳道の史實に近い入唐以前とせねばならぬ。斯かる点に就ては更に研究を要するのである。（九、一〇、二四）